

瘧湿喝病ノ

脈証 第二

本篇は瘧・湿・喝という三種の疾病の脈証と治法を論じています。『傷寒論』には、その中心をなす三陰三陽の証と治を系統的に論じた「弁太陽病脈証并治上第五」の前に、「弁瘧湿喝病脈証第四」という篇が存在していますが、治方がなく、条文はほとんど全部『金匱要略』の本篇と重複しています。『傷寒論』の瘧湿病篇は、『金匱要略』の編集に際し、本篇に吸収されたものと思われる。

本篇の瘧・湿・喝の三病はいずれも外感の邪により発症する外感病で、太陽病と同じ表証から始まりません。その共通点によってこの三病は一つの篇にまとめ

られ、各論の冒頭に置かれたものです。風寒の邪によるものは瘧病を發し、湿邪と暑邪は湿病と喝病を生じます。しかし邪の種類も病人の内部条件も『傷寒論』の太陽傷寒や中風とは異なるので、異なった証候と経過を示します。

瘧病とは、津液不足の人が風寒の邪に外感すると、病人は筋脈に榮養と滋潤が与えられていないため、『傷寒論』にある太陽中風や太陽傷寒と同じ症状は現さず、邪は筋脈に侵襲して項背強急や開口不能、いちじるしいときは後弓反張・筋肉痙攣など筋脈の症状を顕著に現すもので、瘧は瘧と同音同義です。瘧病は邪の侵入の深さと症状の程度によって、剛瘧・柔瘧・陽明瘧の三種に分けられます。

湿病とは、湿邪が筋肉や関節に流入し、経絡中の気血の流通を妨げて、浮腫や痺れあるいは関節痛・筋肉痛やその他の症状を生じる病です。湿邪には外湿と内湿とがありますが、本篇はおもに湿邪が風寒の邪と相合した外感の湿病を論じています。

喝病は夏の暑邪に傷られた病で、傷暑や中熱ともいいます。大いに汗をかいて煩渴し、体内に熱が籠もつ

て息切れし、脈も虚となって全身倦怠感がいちじるしい、現代でいう夏バテや日射病です。虚証・実証・挟湿証に分けていますが、熱性痙攣や意識障害を伴う重症の熱中症は本篇には含まれていません。

〔剛瘧と柔瘧〕

条文 二—1

太陽病、發熱シテ汗無ク、反テ惡寒スル者ハ名ツケテケテ剛瘧ト曰ウ。

条文 二—2

太陽病、發熱シテ汗出デ、惡寒セザルハ名ツケテ柔瘧ト曰ウ。

この二箇条はまず瘧病には剛瘧と柔瘧の二種類があることを述べています。瘧病は傷寒と同様に風寒の外邪を感受して発症するので、その初期症状はまず太陽病として現れます。剛瘧・柔瘧の区別は、両方とも発熱はありますが、剛瘧は表寒実証で陽気は皮下に鬱閉されて外達できず、汗はなく悪寒があるのに対し、柔瘧は表寒虚証で邪は肌表にあり、陽気は外達している

ので汗が出て悪寒はありません。

しかし瘧病の主証についてはいまだここでは提示されていません。

〔難治の瘧病〕

条文 二—3

太陽病、發熱シテ脈沈細ノ者ハ、名ツケテ瘧ト曰ウ、難治タリ。

一般的には、瘧病の初期には發熱や惡寒などの太陽の表証が現れ、脈は後の条文にあるように緊弦であるのが普通です。ここに出ている沈細の脈とは、陰証で津虚血少の脈ですから、まずはじめに難治で予後不良の証を出したのでしょうか。

〔誤治による瘧病〕

条文 二—4

太陽病汗ヲ發スルコト太イニ多ケレバ因リテ瘧ヲ致ス。